

SYNCHROCORD 6
you nanagami presents
adult only
カレーパン
なんでカレーパンはおいしいのか?
カレーパン
120円
人気商品
人気商品
スコーン


SYNCHROCORD 6
you nanagami presents

たくさんの事にこだわりをもつのは悪いことではないと思う。こだわる事があるというのはそれだけハマッタ楽しい事って言うのがあるからだって思うから。人がムキになる必死になると言うのが多いいほどその人の人生は幸せなことだと俺は思う、でも・・・こだわる事という事にこだわりすぎてると言う状況になってしまってると本末転倒になると、ようやく気付かされた。どのメーカーの原稿用紙使ってどのメーカーのインク使ってベタ塗る時はここの道具が良い、料理なら包丁はあそこの会社でまな板はこれでって考える、形から入る俺にはそのやり方と言うか始め方は合っていた、でもある程度まで進むとここが限界だって自分で気付いてしまう。一番重要なことは良質な物を造るという事なのであるということに、過程がどうであれ道具がどうであれ結果がよければいいのだ。ようやくそこに辿り着いた。そして俺はこだわることをなるべく減らすこと決めた。その結果がトーンを貼らないという今回の作品。トーンを貼らないと言うのは冒険でした。貼ったら原稿は黒くなる黒くなれば売れると思っていたものをあえて必要ないと切っていく作業がホントに恐ろしかったです、でも売れるよりももっと大切なものがあると思い出しました。それはトーンを沢山貼るというのは俺の目指してる漫画ではないということに、上手くて早くて面白いと言う作品が俺の目指すものだって・・・沢山こだわりがあるというのはその分その作品はより質の高いものだと思います、その中でも特に雑誌や情報誌と言うのは特に沢山の人が作ってきてるものだからそのぶん沢山のこだわりが存在してると思う、より完成された情報量が濃密なのだと。そう考えると一人で基本的に作ってる俺の作品に関してはこだわる数だけ注意力を分散していかないといけない、結果的にそのこだわりが中途半端なモノになるか、時間をものすごくかける事になってしまう。そんな招かざる不都合なことは極力避けたい、それでこだわる事をやめようと決めました。ただ言っておきたいのは完全にこだわることを辞めたわけではありません減らしただけです、ごく少数のことに究極なまでにこだわるために、こだわりのポイントを減らしたというところです。今回は俺の目指してる作家になるための一歩となる作品だと思います。

2008.8.15 七神優


SYNCHRO
CORD 6.1
you nanagami presents


ひっ
ブブッ
ドプッ
ああっ
すごい
ドプッ
ドプッ
駄目・・壊れちゃう
おかしくなっちゃう・・
そこすごいっ
奥よもっと奥に
ビクッ


ひいっ深い
そこっ・・・
おくっ
奥に・・・


はあっ
……。
はぁ
はあ


ごめんね
あたしのここ
ゆるくて
ガバガバだから・・・
ムゥ
碇君は
気持ちよく
なかったでしょ

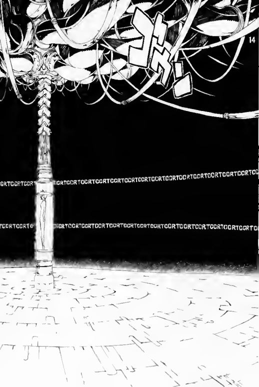


いやそれは僕が
毎日のように
綾波としたから
違うの・・
え？
ヘイフリックの
限界なの
？
でももう少しで
この問題は解決
すると思うの
それまで・・


お尻の穴で我慢して
ここならまだゆるくないから


はうぁっ
すごいい
お尻
すごい
あっ
裂けちゃう
広がっちゃう
ひぐっ
んあっ


あああっ


ゴゴン


ゴゥン
ゴゥン
TCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTC
CRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCR
TCCRTCCRTCCRTCCRTCCRT




ゴポ
ゴポッ
17
ダン



すごい
凄過ぎる
ミチ
あっ
ミチ
あんなに
ガバガバ
だったのに・・
ドポ
ひっ
んはぁ
今日はこんなに
締めつけるなんて
ドポ
ドポ
ドポ



いったい
どうしたら
こんな
キツキツに・・
いいわ
碇君
もっと
もっとよ
ひっ
19
もっと
奥に・・・
だってあたしは・・・


20



四人目だかっ・・・
CCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTC
CCRTCCRTCCRTCCRTCCRTCCRTC

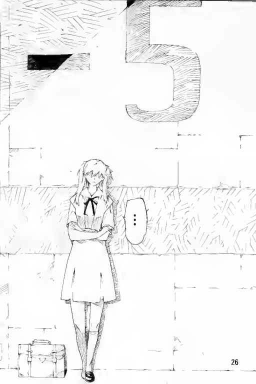
補足説明

あまりこうゆうのはやらない方が良いのだけれど、今回の「6 1」に関しては俺が読んでもさっぱりな所があるので補足説明を・・・アニメの中でリツコが「複数の入れ物中で魂が存在したのは一つだけだった」というような台詞をはくシーンがあるのですが、これから推測するに俺は綾波という存在は入れ物の肉体が傷つく又は劣化しても中身の魂を他の新しい劣化する前の肉体に移す事によって生きていけるモノだと思っていました。ところがそこには記憶が存在してない。言い換えると肉体を新しくしたものの今までの記憶という思い出をリセットして初期化した状態になっている。でなければ三人目の綾波が出てきたときの「わからないのあたしは三人目だから」って言葉は出てこない。だから魂は受けつながれたとしても記憶はうけつながれてないといのが俺の意見・・・なのだけれど、そうなると今回の劣化した肉体を新しくしてガバガバだったあそこの締まりをよくするというオチが使えなくなる。それに記憶がないのに肉体関係もつのってなんか不自然すぎません？全然知らない人なのにセックスしまくるってのも明らかにおかしい。まあ設定として俺でデータ入力してそれっぽく演技すならいいのだけれど、さすがに感情というか本音は偽れない。そこで考えたのはこの話の中では魂と共に記憶も受けつながれて行くという設定にしました。が、それがなかなか読んでる方には伝わらないものですね、かといってそれをだらだら説明した所で一般の漫画ならともかくエロ漫画ではそんなもの必要ないと言うのが正直な俺の意見です。そうゆう説明を入れるくらいならもっと絡みのシーンを増やせって俺のなら思います（笑）。だからここで説明する事にしました。そもそも俺の同人誌は基本的に長い話が多いです。それは長くないと読み応えがないからと思っていたので基本的に50ページくらいなものを書こうとするのですが、その際にどう考えても絡みのシーンだけではそんな枚数をもたせる事ができないと言うのがあり、それを埋めるためにそうゆう説明のシーンでページ数を稼ぐと言うのが今までのやり方でした。ところが今回毎月ごとに書く癖をつけるために小分けにしてイベントごとに20ページづつ新しいのを発表していくというやり方により、締め切りをいちいち設けるという方法を試すために、短い期間で出来るような作品というのが必要となり今回のような話を作りました。さすがに短いだけあって一気に作れたのですが、やはり短い枠では難しい話というのはやはり駄目だなって思い知りました。あと小分けにするのも俺的には締め切りがあって書く気が増していくけれど、買う人にとってはどうなのって？言うのも、やってみてちょっと思いました。その辺の事もおいおい考えていかないといけないなって思っていたりする今日この頃です。


SYNCHROCORD 6.2


MENTAL TOXICITY LEVEL
ELAPSER
L.C.L PURITY
CAUTION
00
01
02
活動限界ギリギリの数値です
レイはともかくアスカにいったてはかなり深刻です
それにくらべシンジ君のシンクロ率はむしろ・・・
00
01
0


いったいどうしたんでしょうか？
疲れているのよ
疲れるっていったいなんでよ？
それは…




なんで帰らないのよ？


碇君を待ってるの
な、何のためによ
なんのためにって・・・


碇君に抱いてもらうために


D-5
D-6
D-7
し、シンジが
あなたなんか
相手にするわけ
ないじゃない
あいつには
あたしが
ちゃんと
ムカ
あなたが
決める事
じゃない
パ


え？
あの、今なんて…
だから
ふたりと別れなさいって言ってるの


ごまかしても無駄よ、ちゃんと調べはついてるわ
だ、だとしてもそんなことミサトさんに言われれる必要は…


ヒリ
ヒリ
はあっ
はぁ
あなたには
わたさない
あいつはあたしの
モノなんだから





36


タタッ
あたしは負ける
わけにはいかないのよ

フリだけで売られても・・・

さて「6.2」の思い出というのは・・・まあ売れませんでしたと言うのが第一印象です。そりゃそうです、何といってもからみのシーンがないのですから。18禁といいながら普通の話になってました。しかたがない事なのですが絡む為にはそのための状況というのが必要だって思うので「セックスしよう」で始めて、普通にセックスするのでは毎回同じ話になってしまい、それを何度も何回も書く意味がない、続ける意味がないと思うのです。そのための状況を毎回変えるこの始まりのフリのページは必要なのだと思うのですが、買ってる方はどう思うのでしょう？。俺は同じような話なら買わなくてもいいやって結論を出すので、絡んでるキャラは同じでも状況が全然違うと言う工夫を続きを書くためにはしなければいけないと思っているから、続きがなかなか出来ない理由なのだろうと自分で分析が出来てます、そんなことは買ってる方には通用しませんね。新しいアニメにハマってそれで新しいキャラで他のジャンルで書いてきた同じような設定で絡んでいくというほうが実に楽だと思います。好きだから抱きたいからセックスするという展開はものすごく自然だと思います、でも一度ならともかくそれを何度もやるとなると、新しく書く意味があるのかって俺の中での疑問が発生してしまい、その悩みが蓄積して一切作業が進まなくなるという時期がありました、一つのジャンルにこだわって書いてるというのは同じものにしない、状況を変えるという努力がいると俺の勝手な思い込みですが、ものすごく俺の中で重要なファクターとして存在してます。だから「6.2」は状況を変えるためのフリとしての話でした。このフリのあるなしで全然後の話が変わってくるのですが、そのフリだけ売られてもって、やっぱり思いますよね（笑）


SYNCHRO
CORD 6.3


これが解決策・・・
そうよ 2人とわかれる代わりにここで
あたしの身体を好きなだけ犯させてあげる



シンジのやつ
いったいどこに
居るのよ？
とにかく
今はファーストに
会わさずに連れて
帰る事が先決よ
もうっ
使えないわね
ホント


もうこんなになってるなんて・・・
本当に元気ね・・
チュポ
チュポ
あたしのアゴすぐ疲れちゃうよ
ああっすごいこんなにヒクヒクしてるなんて・・・
ご、ごめん
謝らないの元気なのはいいことよそれより・・・
シンちゃんのこれ・・・


あたしのオマ○コに早く頂戴
トロ
遠慮なんかしないで思いっきり犯しまくっていいのよ


ずぶっ
ずぶ
はあっ…
なにこれ、
駄目ぇ
さ、裂けちゃう…
いや…それ以上に
ひっ
深いぃ
ググ



あうあっあ
ギチュン
ビク
嘘っ・・入れるだけでこんなに・・
ビク
ギチュッ
ギチュッ
感じるなんて・・・
ミサトさん動くよ
えっ？
ひぃい


ドクンッ
ズンッ
ズン
ダメぇ
これすごいいい
ドドドンッ
おかしく
なっちゃう
パンパン
んなになんて…
ドチュ
ドチュ
ああっ


ドキッ
ドキッ
ドキッ
ひあっ
あ、そこ
イクわ
ああっ
ドキッ
ギシ
ギシ
ひっ
ドク
狂っちゃう・
ドリュ


ギシ
ああっ
ギシ
ギシ
むあっ
ダメ・・
ひっ
ダメその
角度は
じゅぽ
じゅぽ
じゅぽ
そんなに
激しく
したら・・・


ドッ
感じる。
感じちゃう
すごいそれ…
ビク
ビク
ビク


ひっ
ああっ
すごいっ
うあっ
いいっ
気持ち
いい
むあっ
50
奥よもっと
奥のほうまで
奥がいいの
奥が‥
もう
ダメぇ


シンちゃん
もっと突いて
ああ
ひあっ
そこ
ビクビク
ズク
もっと
激しく
ドプ
ズク
うぅむ
ドプ
ぐちゅ
もうイク
もう・・
トプ


はあっ はあ
はあ
ヒクヒク
はあ
あっ ダメ
そこは・・
お尻はダメよ そこは・・
お尻の穴は 許して・・・


いいわ
シンちゃん
好きに弄んで
その代り・・
あたしのアナルを
たっぷり堪能して


ああっすごい
そんなに
ほじったら・・
あっ
ひイイ

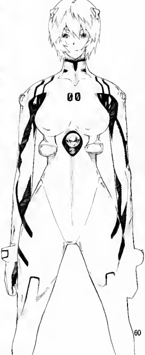

クイクイしないで
グリッ
グリッ
お尻で逝っちゃうっ
アナルをほじられるだけで…
何、いや この感じ
ひぐぅ


はあ
ふう
約束よ
シンちゃん
アスカとレイと
ちゃんと
別れるのよ
その代わり・・
あたしの肉体に
何しても
いいんだからね
ハァ
ハァ


ほ、ホントに
何してもいいの？
ドプ
ドプ
ドプ
いいわよ
あん
ま、まだ
するのね
いいわ
たっぷり
堪能して
ひっ

to be continued・・・

ようやく出す見込みが出来そうです。何のことかというと次回作の話です。次回の「シンクロコード7」はアスカの話です。本来ならこれを「6」として出すはずで作業してたのですが、トーンを貼る作業をしてる過程で、トーンを貼る事の意味というのを真剣に考えては嫌々作業をやるという無限ループに陥り、完全にやる気というのが消滅してしまい、こんなに漫画書く事って面白くない事なのかと思い悩み、あまりにきつすぎて続けていく自信がなくなってしまうような状況に陥りました。トーンは必要ないと思っていただけに、それを延々と貼り続けていく苦行のような作業をしていたのでホントに漫画を書く事が嫌いになる寸前まで追い込まれてました。これは駄目だ、このまま行ったのでは俺は漫画が描けなくなると思い、原点に戻って俺が好きな表現方法というのをとにかく描いてリハビリしようと思い立ち、それを行動に移したのが「モノトーンズ」という作品でした。簡単に説明すると「モノトーンズ」とは雑誌のようなものです。その中では色んな作品を書く事が出来るというコンセプトで、売るためではなくとにかく売り物にならないような短い話および他ジャンルに手を出す切っ掛けの発表する場としての本というものでしょうか。基本的にイベントのみの販売で数は出さない、とにかくほんの少しでもいいから発表の場が欲しかった。ルールはなるべくトーン貼らないというモノのみ・・・トーンを貼らないといけないという強迫観念が俺の活動を完全に停止させたのでそれを逆にすれば好きになるのではないのかって思って始めたのですが、それが当たったみたいです。おかげで作業自体はキツイのですが今は漫画書く事が楽しくてしかたがないです。さらにある程度の枚数がそこでたまったら、今回のように一つの作品としてまとめようと思うと初めから思っていたのですが、嬉しい誤算というか、とにかく短いスパンで発表できるというのは常に小さな仕事の締め切りに追われてるという状況がそこに出来るので、小さなゴールに向かって行きそのつど完成というご褒美を貰えるというのが俺には合ってることに気付かされました。一気に巨額の負債をまとめて返済するのではなく、毎月少しづつ返済する事のほうがやり甲斐が出るという感じです。体験しないとわからないと言うのが俺が馬鹿な証拠なのですが身をもってわかっただけでもマシですね。そして今回ようやく「6」が本になりました。だから「7」に移る事が出来ます。いつ出るかはホームページのほうで発表しますから、そこで確認してください。とにかくようやく「7」を出す見込みが出来そうです。





ホームページアドレス
http://www2.tbb.t-com.ne.jp/nanagami/index.htm

ご意見ご感想はこちらに
ic110187-5974@tbi.t-com.ne.jp



趣味が読書と料理・・・何だこれ？なんだこの教科書にかかれるような模範解答は、ちょっと前までこんなこと言うやつに対してものすごく無趣味だなオリジナリティーがないよって本気で思っていた。個性というのがないからそんなこと書くのだって、ところが最近の俺と来たら・・・プロフィールにそう書きたくて仕方がない、想像以上にそれが個性というのがわかってきたから・・・読書に関してはまあその良さというか本というのがものすごく面白くなってきた、こんな事言っても伝わらないだろうけれど、読まないことが損としか思えない、それほどまでに思う、別に偉くなりたいとか知識を増やしたいとか一切思わない、ただ面白いだけそれだけで読んでる、しかしなんで本を読まない人種がいるのかって言うのも俺には分かる、俺の自身が本を読まない人種だっだから、なんで本を読まなかったのかって言うとめんとくさいからめんとくさいことって面白くないことだって思ってる自分がいたから、そのめんとくさい理由に一文字一文字読んでる自分がいた、それこそ暗記するようにテストに出ないのに暗記しても意味がないのにしている自分がいた、だから読む事が怖くなった、頭に入ってないのなら読んでも意味がないよって言われるような気がして・・・そんなこと被害妄想に過ぎない、でも子供のころの俺にとってはそれで本が嫌いになる理由としては十分だった、ところがきっかけとは恐ろしいもので、そのきっかけでものすごく本が好きになってる自分がいる。世の中わからないものだ、ただ漫然と生きてるとものすごくする事がなくものすごくつまらないことのように思える事がある。そんなときに本を読むと救い出されたような気がする、なんもかんもわかった様な気になって絶望してしまいそうになってしまうが本を読むと自分がいかに小さくそれで何も知らなかったというのを思い知る事ができる、まだ登り残してる山が沢山あるではないか絶望するならそれを登ってからでもいいじゃないかって思う。それともう一つの趣味が料理これは気分転換に外で食事をしてもそこがお店ならどんなに雰囲気が良くてもいつかはでないといけない何時までもいるわけにはいけないって思うようにになって、さてどうしょうと思ったときに、なら俺が作ればいいじゃんって、部屋の中で快適に過ごすためにするはずの行為だったのだが、すごくそれにはまってしまたということなのだけなのだ、けれどはまるとものすごく奥が深いことに気付く、料理にはまってしまって部屋から出れなくなってしまったではなく部屋から出ないためにはどうするべきかって考えた時というのが俺らしい実に馬鹿っぽい、でも理由やきっかけなんかどうでもいい要はそれが実用的になってしまったらものすごくラッキーじゃんって思う、好きになることというのは誰にも止められない、そんなに上手くなったって意味ないじゃんって言うところまでいくそれが好きになるということだって思う、でもホントに意味がない社会的貢献もない、ただ上手くなりたいもっと極めたいと思う自分がいる、極めるというのはそれでしか好きになりすぎる事でしか辿り着けないものではないかって思う。好きだから努力する血反吐はく、その点で言うと俺の本業に関してはまだまだだなって思う、もっと漫画かないと、もっと好きにならないとって・・・、 2008 8 15 七神優





偽カレーことハヤシライスについて・・・

ハヤシライスが猛烈に好きだ。なのに子供のころはカレーの偽者って思っていたから所詮は偽者って思いながら、ああ本物がよかったなーって食っていた気がする。でも当たり前のことだけれどハヤシライスはハヤシライスであってカレーの代用品ではなく本物なのだ。それでふと思ったのはハヤシってなんだ？って事。カレーの意味はカレー粉を使ってるからだろうけれどハヤシは？林の中に生えてるなんか木の成分でも使ってるのかって思うが当然違う、まあ当たり前のことなのだけれど、だとしたらハヤシさんって人が作ったのか、一番それっぽいのだけれどこれも違うわな。調べるとハヤシライスは洋風料理なのだ。（hashed meat and rice）と書くらしいのだが、意味は薄切りの牛肉玉ねぎを炒めトマトケチャップやドミグラスソースなどを入れて煮込み飯の上にかけた洋風料理・・・hashの意味が寄せ集め、つまりごたまぜって料理って意味らしい。それでハッシュ→ハッシュド→ハヤシになったのではなかろうかと思うが、日本語じゃなくて英語だったのかってのに驚く、実に無理がある俺理論だけれど。まあ正解か不正解かわからないがこのあたりで俺は納得したかな、ホントに薄い納得なのだが。でもあらためて調べてみるとその源流がわかる、なんならカレーよりももっと古いのかも知れない、なのに俺の中でなんで偽カレーのあだ名で呼ばれていたのか？。思うに味が微妙だったからなのかも知れない、あっさりと言うか何かピリリとしてないというか、ぬるいんだよな味が、辛いとか甘いとかはっきりしてないから印象が薄い、その微妙な味加減がいいのだけれど、カレーに比べるといささかインパクトに欠ける気がする。つまり弱いのだ・・・やはり偽カレーって呼ばれてもしかたがない気がするなって思う。大衆的なカレーは豊富なバリエーションがあるのにたいしてハヤシライスは一つしかなと思う。チキン、ポーク、海鮮、カツ、スナック類のカレー味、これらのものはカレーライスと言う超ヒット商品に便乗した結果、類似商品だと思うけれどハヤシにはそれらがない・・・そもそもごちゃ混ぜと言うのがある時点でそこにルールが存在してないから、どれが本物かって言うのがわからなくなったと言うのがある。カレーの基本は牛肉、人参、ジャガイモ、玉ねぎ、カレー粉と固定観念みたいなものがある、それ以外のものが入るとそんなもの入れてるのって驚かれる、例えば俺んちでは大根とか。ハヤシにはその基本ない、いや思いつかない、しかも辛い甘いと言う辛さのランク付けというのがない、どれ買っても同じとは・・・つまり味のバリエーションがそんなにないのだ、なんだろこの差は、国民食になったモノとなりそこなったモノってここまで差があるのか、偽カレーことハヤシライス、でもまあそんなことどうでもいいくらい美味いからこそ今でも残ってるのかも知れない・・・さて今日の晩御飯は何にしよう？。当然！あれに決まってる。　2008.8.15 七神優





誌名 「SYNCHROCORD 6」

発行日 2008年8月15日

発行元 SEVENGODS!

作画 七神優

印刷所 ねこのしっぽ

無断転載・Web転載・複写・複製禁止
18歳未満お断り

ホームページアドレス
http://www2.tbb.t-com.ne.jp/nanagami/index.htm

ご意見ご感想はこちらに
ic110187-5974@tbi.t-com.ne.jp



食パン
240円
SEVENGODS!
COMICS 2008